

知られざる図書館員 三木武吉

藤原 秀之（資料管理課長）

早稲田大学の歴史はそのまま早稲田大学図書館の歴史である。そして早稲田大学図書館の歴史はそのまま早稲田大学図書館員の歴史でもある。2010年、創立から128年目を迎えた今この時まで、多くの図書館員が集まり散じていったことになる。その中には誰もが知っている有名人が図書館に勤めていたことがある。かつて本誌でも「しられざる図書館員」として童話作家坪田譲治を取り上げたことがあった。（『ふみくら』12号、1987年）掲載から20年以上が経過し、すでにそのことも歴史の一ページとなり忘れ去られているのではないだろうか。そこには次のように記されている。

本館に残された館員坪田譲治に関する唯一の記事と思われる大正六年十月二十二日の『事務日誌』に依れば、「洋書整理部員として坪田譲治雇入の事に内決す 但給料未定」と記されている。（中略）坪田が後年自編の年譜で、「本が思う存分読めるとして楽しみにして行って見たが、余り沢山の事で、目うつりがして、却って読めなかった」と追想しているように、その当時としては少なからぬ蔵書数を持つ図書館ではあったが、多感な作家坪田にとって安住の地とは成り得ず、僅か五カ月程で退職するに至った。

90歳を超える長寿を保った坪田であったが、その人生、あるいは創作活動に、青年期の図書館での生活、ほんの5ヶ月の生活が何らかの影響を与えたのか、それは定かではないが、しかし館蔵資料の何処かに、彼の足跡が残っているだろう事は確かである。

さて、本稿でとりあげる図書館員は、政治家・三木武吉である。戦後55年体制の礎を築き、のちの自民党の長期政権の礎を築いた彼に、早稲田大学図書館での勤務経験があったことを知る人はそう多くはないだろう。

三木武吉（みき ぶきち、1884～1956）。香川県高松市の生まれで、東京専門学校邦語法律科に進学したのは1901年のことであった。その前後を見ると、永井柳太郎、石橋湛山、中野正剛ら日本政治史を彩る多彩な面々がいる。在学中の1902年に早稲田大学と改称さ

れ、1904年に大学を卒業、その後弁護士等を経て1917年に衆議院議員に憲政会から立候補し、初当選した。自ら重要ポストにつくことはなかったが、1955年の自由民主党結成にいたる過程では中心となって行動したことはよく知られている。後に記すように、図書館に勤めたのは大学を出た直後のことであつたらしい。

彼のことを記した伝記は複数刊行されており、図書館勤めのことも記されている。そこには三木が市島謙吉にその力量を買われ、「こうして三木は図書館設立に一役買うことになったが、少し誇張していえば早稲田大学の図書館は三木の卒直（マ）さが設立を早めたといつてもよからう」（三木会刊『三木武吉』、1958年）とか、「彼の与えられた役目は紹介状をもらって名士や大学の先輩を訪問し、書籍の寄贈を受けたり、諸先生の希望する新刊書、古本を買い集めたり、その索引表をつくったり、兎に角新しい図書館の建造なるまでは小使兼館長という一人十役ぐらいをかねていた」（重森久治『生きた政治史 三木武吉太閤記』、春陽堂、1956年）とあるが、さすがにこれは誇張である。そもそも彼が卒業したとき、すでに新しい図書館は開館していた（1902年開館）。それでは実際には三木はどんな仕事をしていたのだろう。いくつかの記録から検証してみよう。

彼について記された図書館の記録には次のようなものがある。

『春城日誌』明治37年9月10日条

（前略）校友三木某、田中唯の添書を齎し来訪。

『館長日誌』明治37年9月12日条

一、校友三木武吉、当分写字之為め本館へ備入るゝ事とセリ

『同上』明治37年9月13日条

一、川田家図書閲覧ニ供すべき分の目録謄写成る。依つて分類を取調べ、三木武吉の手にて「カード」を書き始む。

『同上』明治37年9月14日条

一、川田家より手伝ニ来り居る山田市郎を写字生として採用致し呉るゝ様、杉山令吉氏より横井時冬氏を経て申込あり。右ニ付、三

木の身上片付候上ハ、月給六円にて備入
るゝ事に略々承諾之旨返答をなす。

『同上』明治37年10月26日条

- 一、三木担当之蔵経細目、不日出来之筈につき、
其上は引続き左之細目を調整すべき事
粵雅堂叢書

太平御覧 総部類丈にてよろし

右館蔵

知不足齋叢書

史 餘

右川田図書

『同上』明治37年10月27日条

- 一、三木担当之大蔵経細目カード出来す。カード
函三個ニ満ツ。

『同上』明治37年11月5日条

- 一、三木武吉ニ役者評判記之細目を作することを
命す。

「当分写字之為め」に雇われ、「身上片付」くまでの
短期採用であったことから、伝記にあるような「小使兼
館長」でないことはあきらかである。ただ写字生として、
大蔵経のカードを取り終えると引続き役者評判記のカー
ド作成に取り掛かっていると見ると、真面目に
働いていたのであろう。コツコツと一枚一枚カードをと
っている姿からは、のちに「政界の策士」と評された三
木の、実直な一面をうかがい知ることができる。

図書館と三木とのつながりは実はそれ以後もあるこ
とがわかった。特別資料室に残されている各種の記
録を見ていたとき、「故 三木武吉氏旧蔵漢籍寄贈リ
スト」を発見した。115部559冊の資料が三木から寄贈
されたことになっている。内容を見ると、漢籍だけでな
く和書もかなり含まれており、一部の資料は受け入れ
られていることが確認できたが、寄贈の時期については
現物からもわからなかった。

現在、中央図書館では利用者用のカード目録がほ
ぼ撤去された状態にある。目録はすべてオンライン目
録(WINE)で検索してください、とは20年前には考え
られなかった事態である。では三木の書いたカードも
すっかり無くなってしまったのかというと、そうとも言い
きれない。古書、貴重書を扱う特別資料室では現在も
カード目録が継続しており、古い時期の業務用カード
のうち廃棄せずに残したものがある。その中に、前述の
『館長日誌』に三木が担当したとされていた「粵雅堂

叢書」のカードがある。カードには「銭恂氏寄」とあり、図
書本体にも「支那銭恂所有」とあることから、清国末期
の外交官である銭恂から寄贈されたものとわかる。
銭恂は1898年に留学生を率いて本学にやってきてい
るが、その後、東京専門学校が早稲田大学へとかわる
直前の1901、1902の両年、架蔵の図書(漢籍)約4,000
冊を寄贈してくれている。銭恂やその寄贈図書につい
ては高木理久夫氏の論考に詳しい。現在残っている
カードを見ると、メインのカードと細目が同筆と思われる
ので、あるいは三木の手になるものとは別のものかもし
れない。ただ本書が寄贈されたのが1902年、三木が図
書館に勤めていたのが1904年なので、三木がとったの
は本書のカードであったことは間違いないだろう。だと
すれば本書は、清国末期の外交官・銭恂のもとから当
館に寄せられ、そこで戦後日本の道筋を決めた政治家
の一人である三木武吉の手でカードが作られ、公開さ
れるに至ったことになる。なんとも不思議な縁だといえ
よう。そのカードも、今では利用者の目に触れることは
なくなっているが、しかしその成果がWINEのデータに
いかされているだけでなく、後の関連文献の収書にも
活用されていたことは間違いない。さらに彼の寄贈図
書が今も図書館で多くの利用者に提供されていること
を、本人はどんな気持ちで見守っているだろうか。

図書館の蔵書検索ツールからカードがほぼ消え去
った今日、一枚のカードの記述、それは図書だけでなく、
それを書いた人物の表情をあらわすこともある。もちろ
ん、利用者にとっては、どうでもいいこと、かもしれない。
しかし、そうした仕事の一つ一つが今につながってい
ることを、図書館の後輩である我々図書館員だけでも
胸に刻んでおく必要がある。

<参考文献>

高木理久夫「銭恂と早稲田大学図書館」(『ふみくら』76)

同「早稲田大学開校期における銭恂の寄贈図書について」(『早稲
田大学図書館紀要』55)

同「銭恂年譜」(『早稲田大学図書館紀要』56)

早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史』2、5(1981、1997
年、早稲田大学出版部)

市島春城『春城日誌』明治37年(市島春城資料、14 1919 541)

古典籍総合データベース参照。

市島春城『館長日誌』明治37年(市島春城資料、14 1919 924)

古典籍総合データベース参照。